

提灯

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 芙由美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40137

10. 提灯

西川 芙由美

1. はじめに
2. 加賀提灯
3. 蛸島の提灯
4. 地域との関わり
5. おわりに

1. はじめに

蛸島町について聞き取り調査をしていく中で私が最も興味をもったのは提灯であった。蛸島キリコ祭りは能登の様々な祭りの中でもひとときわ美しいと言われ、提灯はそのキリコになくはならないものである。また、祭りの際に家の玄関に吊るしておく「門提灯」や神社に奉納するための提灯など、提灯は祭の際に非常に重要な役割を果たしている。蛸島町では金沢や県外に発注する人は少なく、ほとんどの人が蛸島町内にあるただ1軒の提灯屋に依頼しているという話を聞き、提灯づくりを行っているA氏（本貝蔵、男性、60歳代）にお話をうかがうこととなった。

本章では全国的な背景から提灯という伝統工芸について触れ、蛸島で作られている提灯のもととなっている加賀提灯、そして実際に蛸島で人々に使用されている提灯についてお話をもとに詳しく見ていきたい。

2. 加賀提灯

この節では、まず提灯というものの全国的な歴史を見ていき、蛸島で作られる提灯が加賀提灯をもとにしているということから、加賀提灯について触れ、またその比較として岐阜提灯についても少しだが触れたいと思う。

2.1 提灯の主な歴史

提灯とはろうそく用の灯火具で、球形、円筒形などいろいろあるが、いずれも細いヒゴを螺旋上に巻いて骨とし、これに紙を貼り、上下に口と底（がわ）を取り付けて折り畳みできるようにしてあるものである。おもに夜間の外出に携えるが、また夜間屋外の目標、照明などとして提灯を掲げておくこともある。

古くは「挑灯」と書き、木枠に紙を張り、吊灯籠のように一か所に掲げ置いたものであったが、やがて籠に紙を張り、携行用の取っ手をつけた籠挑灯となったという。天正・文禄（1573～1596）のころには折り畳みできるものとなり、手に提げる灯火具ということから、「提灯」の文字があてられるようになった。挑灯は一か所に掲げ置く灯火、提灯は携えてゆく灯火の意で、この灯火具の発生過程を物語っているといえる。これが江戸時代に入ると、在来の行灯にかわって、携行用灯火具として流行し、現在のような火袋（提灯やランプなどの紙の覆いの部分を指す）や折り畳める箱提灯が作られた。その後、ぶら提灯（球形又は卵形の火袋で、棒の先にぶら下げて使う提灯）、高張り提灯（長い竿の先に付けて高く下げて使えるようになっている提灯）、弓張り提灯（ぶら提灯を、弓で火袋を張り、ろうそくの火を点けたまま床に置けるようにしたもの）、小田原提灯（使わないときは折り畳んでおき、使うときに伸ばして広げられるようにしている提灯）など種類も増え、用途も灯火用から祭礼用、装飾用にまで広がってきた。そしてその後江戸時代には安価な和ろうそくが生産されるようになったために提灯も広く普及していくこととなる（『日本大百科全書 15巻』「提灯」）。

2.2 加賀提灯について

金沢では最盛期には60軒もの提灯屋があったが、その多くは和傘との兼業であった。そして近代化に伴い、懐中電灯の普及や街灯が整備されるとともにその数も少なくなっていく。現在、石川県内において提灯を製作販売している店は非常に少なくなり、神社や市町村の祭礼用、装飾用として祭の時期に合わせて制作し、傷んだ提灯の張り替えなどの修理も請け負っていることが主であろう。そのほとんどが直接受注であり、注文は県内が主である（石川新情報書府HP「加賀提灯」）。

加賀提灯の特色としては、竹の骨に和紙を貼る伝統的なものという点がある。長い竹を螺旋状に巻いて作る岐阜提灯と違い、細く割いた竹を一本一本輪にして糸で留め、これを型にはめてゆき、縦に木綿糸で繫いでゆく。こうすることによって手間はかかってしまうが、伸びが大きくて一本の竹骨が折れても全部が外れて破れるということがなく、丈夫で美しい曲線を描くことができるのである（写真1）。

また、大きな違いとしては提灯の上下に付けられる黒い部分、「曲物」の違いが挙げられる。加賀提灯では「合口」といって曲物の大きさが上下同じなのに対して、岐阜提灯では上が大きく下が小さいものが多い。蛸島町の提灯も前者の「合口」であり、たまに岐阜の会社に提灯を頼む人がいるが、岐阜提灯だと蛸島町のキリコに全く合わないのである。それを見られて風情がないと怒られることもあるという（写真2）。

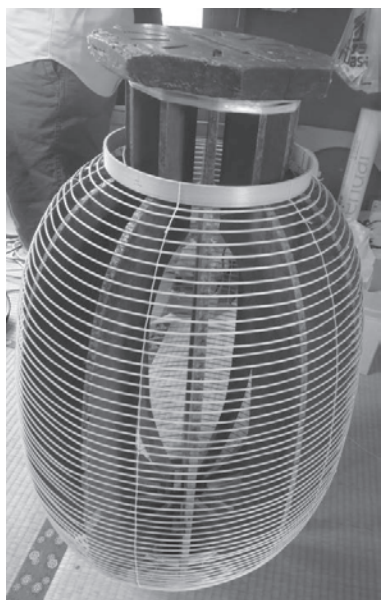


写真1 (2013年 筆者撮影)



写真2 合口 (2013年 筆者撮影)

3. 蛸島の提灯

この節では、蛸島町で唯一提灯屋を営んでいる方にお話を聞いたことに基づいて、蛸島町の地域住民に親しまれている提灯についてまとめる。

3.1 提灯づくりにあたって

蛸島町において提灯は主に3種類ある。1つはお祭り用の提灯だ。蛸島町内のそれぞれの地区ごとに提灯をキリコに取り付けてキリコ祭りをを行うのである。白抜きに地区名を描き、まわりに朱を入れてぼやかすと、灯りをつけたときに色合いが優雅になるという。2つ目はお祭りの際、玄関に吊るしておく「門提灯」である。割と昔から多くの家があり、お祭りのときは親戚や友人を招待して、おもてなしをする風習があるのだが、昔は街灯などもなかったため、招待された人がどの家に行くのか暗くてよくわからなかったという。そこでそれぞれの家に1つずつ門提灯を玄関

に吊るすことで、目印にしたというのが元である。そのため門提灯には家の名前と家紋が描かれている。3つ目は神社に奉納するための提灯である。細長い円筒形をしており、漁師が大漁を祈願したり、厄年の者が祈念して奉納したりするものだ。奉納する人の気持ちによってその大きさは様々であるという。

作り方

まず、提灯の張り型を土台にはめ込んで組み立てていく。張り型は木でできていて、三日月のような形をしている。制作する提灯の大きさによって張り型の大きさも異なり、ここで使われている張り型は数百年前から代々受け継がれてきたもので横紐を巻くための溝の、何度も欠けた様子や手直しされた様子がその歴史を物語っている(写真3・4)。張り型をはめ込んだらその上下に貼り輪を固定し、提灯の原型となる。できた型に合わせて横紐・縦紐を一本一本均等な力で巻いてゆき、骨組みに糊をつけて和紙を貼っていく。糊は蕨粉を炊いて使用するそう。また糊は夏に腐りやすいので柿渋も添加するという。一晩乾燥させた後、提灯の表面に文字や絵を入れていき、色をつける。文字などの出来具合によって提灯の仕上がりも左右されるので、非常に気を使う作業であろう。和紙は湿気に弱いので最後に油を塗るのだが、大切なものには荏ゴマ(えごま)油を使用するという。この荏ゴマ油でコーティングすることで和紙が湿気や雨に強くなるそう。その後再び乾燥させてやっと提灯が出来上がるのである。

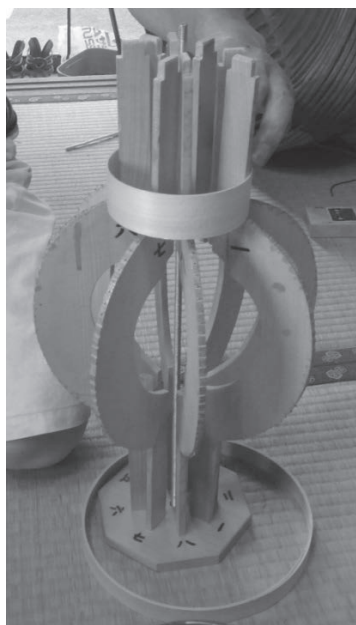


写真3 張り型 (2013年 筆者撮影)

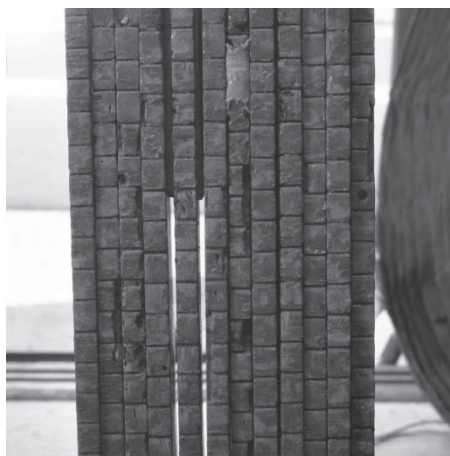


写真4 張り型拡大 (2013年 筆者撮影)

大きさ

大きさについては、小さいものはお祭りの際キリコに使用される提灯で 14cm～15cm ほどのものから、大きいものは門提灯で 120cm ほどの提灯まであり、その種類や用途によって大小様々である。

保存

提灯に使われる和紙は虫に喰われやすく、また湿気に弱い。そこで防虫剤や乾燥剤と一緒に畳んで箱に入れて保存するのが一番良いらしい。ナイロンを被せたまま保存すると湿気がこもってしまうし、吊るして保存すると油っ気が抜けて和紙が古くなり裂け目が出てきてしまうそうだ。

3.2 他との違い・こだわり

提灯屋によってそのこだわりは様々である。お話をうかがった提灯屋では「影紋（裏紋）」を門提灯に使っているそうだ。これは表紋が黒塗りで裏紋が黒縁、横に〇〇家と描くものである（写真5・6）。また門提灯以外の提灯でも、描かれている牡丹の花の絵や幕の絵など提灯屋によって昔から引き継がれてきた家紋や模様の描き方が全部違うのである。柄を見ただけでどこの提灯屋が作ったものなのかすぐに分かるそうだ（写真7・8）。



写真5 表紋（2013年 筆者撮影）



写真6 裏紋（2013年 筆者撮影）

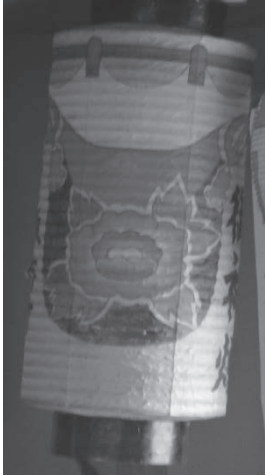


写真7 牡丹の花 (2013年 筆者撮影)

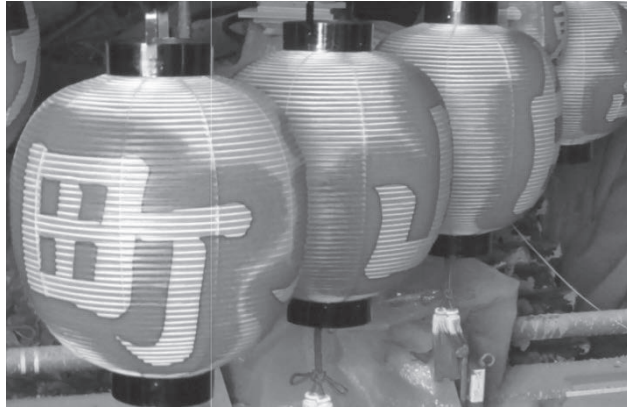


写真8 お祭り用提灯 (2013年 筆者撮影)

3.3 ろうそくについて

かつて提灯が伝来されてから蛸島では、1970年代頃まで提灯の灯りにろうそくを使用していたそうだ。今では見ることはできないが、お祭りでキリコを担いだ際に揺提灯とろうそくの火の光がゆらゆらと揺れる様子は非常に美しかったという。しかし同時に火が燃え移るといった危険性も高く、電気の普及に伴って廃れていってしまい、今ではLEDが使用されている。

4. 地域との関わり

地域によって提灯の在り方は様々である。大量生産が行われている地域では制作過程において、絵紙の政策は「摺込師」、火袋の制作は「張師」、絵付けは「絵師」、塗加工は「塗り師」などそれぞれの専門によって分業が行われている。そのような場合、非常に短時間で完成させることができる。一方、蛸島で作られている提灯の制作は全て一人の職人によって行われており、組み立てから仕上げまで一つずつ作られている。確かに分業で作られているものよりも完成までに圧倒的に時間はかかってしまうし、細かい作業を一人で行うのは大変であると思われる。しかしどんなに大変であっても、一つの提灯に対して最初から最後まで依頼者のことを考えながら作ることができるのが良い点だという。それは依頼者にとっても同じようで、自分の地区のための提灯や自分の家のための提灯はやはり特別な思いがあり、スピードやコストよりも地域や依頼者のことを理解してその風土に合った提灯を作ってくれるということを求めているからこそ、蛸島に住む多くの人は昔から、今回お話をうかがった提灯屋に制作依頼をしてきたのではないかと考える。

5. おわりに

今回の調査を行うに当たって、お祭りに向けて大変な時期であるにもかかわらず快く迎え入れてくださり、提灯に関して何の知識もない私に一つ一つ細かく丁寧に説明してくださいました。また各ご家庭で保存されている提灯を見せて頂くこともできました。短い期間でしたが調査に協力して頂いた皆様、本当にありがとうございました。